

(2) 鳥類

レッドリストに掲載された各鳥類について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種、地域個体群についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

なお、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の表記については、略称として「種の保存法」と表記することとした。

【掲載種の解説（鳥類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、「日本鳥類目録 改訂第6版」（日本鳥学会,2000）に準拠した。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「鳥類レッドリスト」（環境省,2006）の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、「日本鳥類目録 改訂第6版」（日本鳥学会,2000）に準拠した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 鳥類 執筆者 】

高橋伸夫

今回の記述の中で、初版（レッドデータブックあいち 2002 動物編）の発行後に新しい知見の無い部分の多くについては、初版を執筆された稲田浩三氏の文を引用させていただいた。

【 鳥類 調査協力者 】

次の方々および団体に情報提供、写真提供、現地調査等で協力していただいた。

愛知県野鳥保護連絡協議会（愛知生物調査会 渥美自然の会 岡崎野鳥の会 尾張野鳥の会 海上の森自然観察会 カラスの弁護士ネットワーク 三ヶ根ハヤブサを守る会 汐川干潟を守る会 名古屋鳥類調査会 西三河野鳥の会 21世紀の巨大開発を考える会 日本野鳥の会愛知県支部 日本野鳥の会サンクチュアリ室 パンダクラブ愛知 藤前干潟を守る会 三河湾水鳥調査会） 東三河野鳥同好会

五百沢日丸	石井照昭	石川 均	伊丹英生	稲田浩三	大畑孝二	緒方清人
柿本 浩	木村 勝	小嶋良武	駒井恒博	西郷 清	清水正義	下村孝嘉
榛葉忠雄	杉浦史弥	杉山時雄	瀬戸良二	高橋 哲	竹生直行	野田信裕
藤岡エリ子	本田美佐緒	前田茂雄	松井邦郎	森井豊久	山形則男	山本 晃

横山則一

（敬称略）

県内に於ける野鳥生息状況の資料として、西三河野鳥の会が集積している観察記録「西三河野鳥の会データベース」を参考とさせていただいた。

ヘラシギ *Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus)

【選定理由】

ロシア北東部のツンドラ地帯でのみ繁殖する種で、個体数も少なく国際的に絶滅の危機に瀕している。県内では、主に秋の渡りで矢作川河口周辺や汐川干潟にごく少数が飛来して生息するが、近年は観察記録がさらに減少していることから、初版出版時の絶滅危惧 I B 類から絶滅危惧 I A 類に変更された。

【形態】

全長 14～16cm。先端がへら状の嘴を持つ。夏羽は、顔から胸及び上面が赤褐色に黒褐色の斑がある。冬羽は、上面が一様な灰色。幼羽は上面に黒斑があり、いずれも下面は白い。



愛知県幡豆郡一色町, 1988年9月25日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ロシアのチュコト半島からカムチャツカ半島北部にかけて繁殖し、冬期は、インドから中国南西部にかけての沿岸部で越冬する。日本では、数少ない旅鳥として春期と秋期に西日本を中心に記録されるが、越冬の記録もある。

1974年以降、県内では秋期を中心に20例以上の観察記録があり、愛知県は全国的に見て渡来頻度の高い地域といえる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

干潟や埋立地の水たまりなどに渡来し、トウネンなど多種の群と行動を共にすることが多い。へら状の嘴を左右に振りながら水棲の小生物を捕食する独特な採餌方法をとる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での記録のほとんどは、矢作川河口周辺と汐川干潟に集中し、主に幼鳥が秋の渡りの季節に確認されている。春の記録や、秋に成鳥が記録されたのは数例のみである。かつては県内で毎年のように記録され、最多で4羽が同時に観察された例もあるが、1987年以降は飛来数も飛来頻度も減少している。減少の原因として、繁殖地であるシベリア北東部の環境が悪化していること。県内では沿岸部の干潟の環境悪化や、干拓地・埋め立て地から汽水・淡水の湿地が消失したことがあげられる。

【保全上の留意点】

世界的な希少種であり、干潟や河口部の湿地を保全し渡りの中継地の確保に努めるとともに、埋立地や干拓地の遊休部分に汽水や淡水の湿地を復元する必要がある。

【特記事項】

国際湿地連合の2002年までの見解では本種の推定最小個体数を4,000～6,000羽と見積もっていたものを、2003年には3,000羽以下と修正している。地球の温暖化や繁殖地であるシベリアにおける石油や天然ガスの資源開発が進んでいる現状では、さらに5年を経過した現在この種の繁殖環境が改善に進んでいることは期待できず、絶滅への加速が危惧されている。

【関連文献】

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 1998年秋, pp.30. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.126. 世界文化社, 東京.

シベリアオオハシシギ *Limnodromus semipalmatus* (Blyth)

【選定理由】

春秋の渡り時期に、伊勢湾・三河湾沿岸部の干潟や淡水湿地に生息する。1975年から1997年までの間に20例以上、30羽以上の確認記録があり、幡豆郡一色町周辺だけでも10例以上の確認があること。その大半が秋季幼鳥の記録であることから、愛知県がこの種の国内を代表的する生息地であり、種本来の渡りのコースであったことは否定し難い。1975年以前にはこの種をはじめ、シギ類全般の野外識別が困難であったこと、県内から生息環境が喪失した現在は観察記録が無くなったことから、初版の情報不足から絶滅危惧 I A類と評価された。

【形態】

全長 33～36cm。夏羽はほぼ全身が赤褐色で、襟から肩羽、雨覆に黒褐色の軸斑がある。冬羽は、上面の軸斑が黒褐色で羽縁が白色、顔から下面は白色で灰褐色の軸斑がある。幼羽は淡黄褐色で、軸斑は暗褐色。嘴は黒色で太くて長く、脚は黒色。



愛知県豊橋市, 1992年8月12日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ロシア南部のオビ川流域から中国東北部で局地的に繁殖し、冬期は主にインドから中国南部で越冬するが、不明な点が多い。日本には、春と秋の渡り時期にごく少数が渡来し、全国の沿岸部で記録がある。干潟にも入るが、汽水や淡水で泥質の浅い池沼や水路を好み、水田にも入る。

【生息地の環境 / 生態的特性】

干潟や沿岸部の水たまり、水田などで、1～2羽で記録されることが多い。繁殖地の状況など不明な点が多く、国際的な希少種とされる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での記録は、一色町と矢作川河口周辺および汐川干潟に集中するが、全国で最も飛来頻度の高かった一色町の塩田跡が消失するなど、沿岸部の淡水及び汽水の湿地が減少し生息条件が悪化している。

【保全上の留意点】

世界的な希少種であり、干潟や河口部の汽水・淡水湿地を保全するとともに、埋立地や干拓地の遊休部分に安定した生息地となる淡水や汽水の湿地を復元する努力が急務である。

【特記事項】

1996～1998年の春期と秋期の計6回、国内延336箇所で行われたシギ・チドリ類のカウント調査では、全国でシーズン最大2羽(1997春期)が記録されたに過ぎず、全国的にも希少な種といえる。

【関連文献】

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 1998年秋, pp.30. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.128. 世界文化社, 東京.

カラフトアオアシシギ *Tringa guttifer* (Nordmann)

【選定理由】

東アジア地域で最も個体数の少ないシギとされる国際的な希少種。繁殖地のサハリン周辺では、生息環境の悪化が進行しており絶滅の危機に瀕している。県内では、一色町、矢作川河口周辺、汐川干潟などで年により記録されるが、近年は干潟の環境悪化や後背地の淡水および汽水の湿地が喪失していることにより、渡来頻度はさらに減少している。

【形態】

全長 29～32cm。夏羽は上面が黒褐色で頸から胸にかけて大きな黒斑があり下面は白色。冬羽の上面は淡褐色から灰色。幼羽は上面が褐色で、淡褐色の羽縁があり、胸に大きな黒斑はない。アオアシシギに似るが、アオアシシギに比べ嘴は太く足は短く、頭が丸く大きく全体にずんぐりした体型に見える。



愛知県幡豆郡一色町, 1992年9月13日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

サハリン周辺で繁殖し、マレー半島から大陸の周辺で越冬する。日本には旅鳥として春期と秋期の渡り時期に渡来し、河口部、干潟、沿岸部の池沼、水田等の湿地に生息するが、数はごく少ない。

県内では秋期を中心に観察記録が多数あり、愛知県は国内でも渡来頻度の高い地域といえることができる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

干潟にも、沿岸部の埋立地や干拓地にある汽水や淡水の湿地、あるいは水田などにも渡来・生息する。他のシギやチドリの群に混じって行動したり、単独で行動することもある。秋季の記録の大半は幼鳥であるが、春季は成鳥の夏羽が観察されている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

2002年前後の知見では繁殖地として知られるサハリン周辺で僅か30～40番いが確認されるに過ぎないとされていたが、現在はさらに減少しているものと推測される。減少の要因として、繁殖地での化石燃料開発やパイプライン建設などによる湿地の破壊や汚染、カラス類による捕食圧などが指摘されている。県内での記録は西三河沿岸部および汐川干潟に集中するが、浅い汽水池の代表であった一色町の塩田跡が消失するなど、干潟の環境悪化と後背に位置する汽水や淡水の湿地消失が最大の要因である。

【保全上の留意点】

種の保存法により「国内希少野生動物種」に指定されている。干潟や河口の周辺に汽水や淡水の後背湿地を復元し、安定した渡り中継地の確保に努める必要がある。

【特記事項】

1996～1998年の春期と秋期の計6回、国内延336箇所で行われたシギ・チドリ類のカウント調査では、全国でシーズン最大8羽(1996秋期)が記録されたに過ぎず、全国的にも希少な種といえる。また、国際湿地連合は2003年の見解で本種の推定最小個体数を1,000羽と見積もっているが、国内への飛来数、主たる繁殖地であるサハリン周辺での化石燃料開発およびパイプライン建設などの現状を見る限り、個体数はさらに減少していることが推測される。

【関連文献】

ウラジミール・ジーコフ, 1995. サハリンにおける水鳥の生息状況と重要な湿地の現状, pp.5-6. 東アジア渡り鳥ルートツアー報告書. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 1998年秋, pp.30. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.131. 世界文化社, 東京.

オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray)

【選定理由】

近年の県内での繁殖は、2005年まで豊田市稲武地区の牧場の1番いが知られていたが、その後確認が途絶えており繁殖種としての側面から絶滅の危機に瀕している。春と秋の渡りの時期には、伊勢湾、三河湾沿岸の農地などに渡来するが数は少なく、近年の確認数はさらに減少している。

【形態】

全長 30cm 前後。タシギなど同属他種とよく似るが、一般的には体が大きく羽色は淡め、嘴や尾羽が長いことで全体に大きく長く見える。眉斑が目先で太いのも特徴であるが、大陸で繁殖するチュウジシギとの識別は特に困難である。尾羽の枚数は通常 16 枚～18 枚とチュウジシギより少なく、外側尾羽の形や模様などが野外識別の手掛かりとなる。



長野県戸隠, 1997年5月17日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

繁殖地は、ロシアの沿海州、サハリン、千島、北海道、本州、四国、九州で確認されている。冬期は、オーストラリアやニューギニアなどに渡り越冬する。

愛知県には、夏期にごく少数が山間部の草原に渡来し繁殖する。春と秋の渡りの時期には、伊勢湾、三河湾沿岸の農地で記録される。秋の飛来は他のジシギ類より早く、7月から記録がある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

タシギ属の中では、最も長い距離を渡る種のひとつ。国内における繁殖地の環境は、北海道や東北地方では主に平野の低湿地、本州中西部から四国・九州にかけては山間部の湿地や草原で、地上にさら型の巣を作る。繁殖期には、ズビーヤク、ズビーヤク、ズビヤク、ズビヤクと鳴きながら飛び回り、尾羽を開いて急降下しながらザザザと羽音をたてる求愛飛行を行う。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内で繁殖期の記録は新城市長ノ山湿原で 1990 年まで、豊田市池之平で 2005 年までの記録がある。他には豊根村茶臼山高原や豊田市藤岡地区でも記録があり、藤岡地区では 2008 年 5 月下旬に記録があるが定着は確認されていない。また幡豆郡一色町では海岸部で繁殖行動が観察されている。いずれの環境も乾燥化や騒音、宅地化などの環境悪化が見られ、県内での繁殖絶滅が危惧されている。

【保全上の留意点】

山間部の湿原や草原について繁殖環境の保全拡大を促す必要がある。また、渡りの中継地を確保する視点から、水田を含む沿岸部の淡水湿地の保全に努める必要がある。

【特記事項】

2000 年～2003 年の繁殖期に一色町の干拓地に定着してディスプレイ飛行などの繁殖行動が観察されている。繁殖の確認はされていないが、本州中部以南では特異な環境での記録といえる。

【関連文献】

下村孝嘉, 2001. 一色町におけるオオジシギの繁殖行動と生息環境. 西三河野鳥の会 研究年報 vol.4, pp.1-5. 岡崎.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.139. 世界文化社, 東京.

ツバメチドリ *Glareola maldivarum* Forster

【選定理由】

主に春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の干拓地や埋立地などに渡来し繁殖する。かつて愛知県は国内唯一の継続的で生息数の多い繁殖地であり、何十羽もの生息が確認され繁殖していたが、1990年代後半以降その数が激減し、繁殖の確認がされなくなった。最近の全国調査における確認数は数羽～15羽程度であり、県内では毎年1羽から数羽が確認されるに過ぎなくなったため、初版の絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧ⅠA類と評価された。

【形態】

全長 23～24cm。夏羽は、上面が灰褐色で胸と腹に橙色味を帯び、喉は汚白色で黒色の縁取りがあり、目先が黒く下嘴の基部が赤い。冬羽は喉や顔のコントラストが弱く、全体に淡い模様となる。尾は燕尾型で黒く、翼は長く先端が尖り下雨覆は赤褐色。飛翔時は上尾筒の白色がよく目立つ。



沖縄県宮古島市, 1981年5月18日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

中国からマレー半島、インド周辺の東南アジアで繁殖し、オーストラリア方面で越冬するものもある。日本には主に春と秋の渡りの時期に渡来し、関東以西の本州、九州、沖縄で繁殖記録があるが局地的。

県内では、春と秋の渡り時期と夏の繁殖期に伊勢湾、三河湾沿岸の農地や埋立地に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月から5月、秋期は7月から10月にかけて、沿岸部の干拓地や埋立地などに渡来し、単独から数羽の群で生息する。畑作地や埋立地の荒地などで、単独または小規模のコロニーを作って繁殖する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では、鍋田周辺と汐川干潟周辺、矢作川河口周辺で記録が多い。繁殖は、1976年に汐川干潟周辺（豊橋市）の埋立地で初めて確認され、以降は鍋田周辺、矢作川河口周辺、田原町から御津町にかけての埋立地及び周辺の畑作地でも記録がある。埋立地は環境の変動性が高く、畑作地は耕作による攪乱を受けやすい。また、カラスによる卵やヒナの捕食も大きな障害となっている。

【保全上の留意点】

沿岸部の干拓地や埋め立て地の環境を保全し、安定した繁殖環境の確保と創出に努める必要がある。

【関連文献】

山形則男, 1996. 汐川干潟周辺のツバメチドリの繁殖について. BIRDER 第10巻 第10号, pp.46-55. 文一総合出版, 東京.

コノハズク *Otus scops* (Linnaeus)

【選定理由】

県内の山間部に夏鳥として生息するが、局地的で数はごく少ない。かつてはより広範に生息が確認されていたが、近年はさらに生息場所の減少が認められることから、絶滅の危機に瀕していると考えられる。

【形態】

全長 18～21cm。上面は灰褐色または赤褐色で黒褐色あるいは赤褐色の縦斑があり、下面はやや淡色で黒褐色あるいは赤褐色の縦斑と虫食い状の横斑がある。頭部に羽角があり、目の色は黄色で趾に羽毛はない。雌雄で大きさが異なる。



愛知県東三河山間部, 2008年7月10日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

アジアからヨーロッパの中南部、およびアフリカ大陸に分布し 20 程の亜種に分けられる。日本には九州以北に夏鳥として渡来し、繁殖する。

県内では、夏期に東三河地方の山間部に生息し、春秋の渡り時期には平野部で記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

県内では、沢沿いやダム湖周辺の針広混交林または雑木林で生息が確認されている。地形的には急峻な所が多い。県内で確認された営巣例は杉の大木にある樹洞で、ムカデ類や昆虫類などの小動物を捕食していた。キョッ、キョッ、コーと聞こえる声は「仏法僧」と聞きなされ、「声のブッポウソウ」と言われる。愛知県の県鳥に指定されている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

2008 年に行った調査で繁殖期に生息が確認された場所は、豊根村、東栄町、新城市など 6 地点 7 個体程度であった。新城市(旧鳳来町)では 1955 年以前に 17 地点で鳴き声が聞かれたとされるが、2008 年は 1 地点で確認されたのみである。過去には豊田市丘陵部などでも繁殖期の記録があるが、現在は東三河山間部以外での記録は無くなった。

【保全上の留意点】

繁殖期に生息が確認されているのは、全て広範囲に人工光が全く無いか非常に少ない場所であり、車の往来も極めて少ないか全く無い場所に限られている。餌となる、光の影響を受けやすい節足動物の生息環境の保全と、騒音の無い静かな環境の保全以外に、この種の生息環境維持は不可能と推測される。

【特記事項】

2008 年の調査で確認された場所は全て東三河の山間部に限られており、全て後ろに大きな山塊があり、その山塊には車の通行する道路や農業・工業・観光・住宅などの開発が全くされていない場所に限られていた。山塊に道路建設や、農業・観光などの開発の進んでいる茶臼山高原道路沿線や、西三河の山間部では、静寂で夜間人口光の無い場所であっても、生息の確認はされなかった。

【関連文献】

愛知県野鳥保護連絡協議会, 1998. 平成 9 年度愛知県コノハズク生息状況調査結果報告. 愛知県, 名古屋.
五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.84. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1996. 段戸裏谷の野鳥. 愛知の野鳥 1996, pp.233-243. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

ブッポウソウ *Eurystomus orientalis* (Linnaeus)

【選定理由】

県内では元来数が少なく、かつては東三河山間部等で繁殖の記録があるが、近年繁殖が確認されたのは 1990 年代後半に豊田市旭町での 1 番のみであり、現在県内で繁殖の確認は無い。繁殖期以外にも県内での確認は極めて稀になっていることから、絶滅の危機に瀕していると考えられる。

【形態】

全長 29.5cm。頭部は黒褐色、体は光沢のある青緑色で嘴と足は赤い。飛翔時は初列風切の白斑がよく目立つ。



岐阜県, 1992 年 7 月 26 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ロシア沿海州から中国を経てインドまで。サハリン、日本から東南アジアの島を経てオーストラリア東部までの範囲で繁殖し、冬期は低緯度地域で越冬する。

日本には夏鳥として渡来し、県内では、東三河地方の山間部に生息する。春秋の渡り時期には、稀に平野部で記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

樹洞やキツツキ類の古巣で営巣するとされるが、近年は、電柱、橋脚、ダムなど人工物への営巣事例が多くなっている。県内では、山間部の沢筋やダム湖周辺で生息が確認されている。昆虫類を捕食する。ゲツ、ゲツ、ゲエゲエゲエゲエなどと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では 1970 年代に新城市の鳳来寺山と愛知県民の森で繁殖が確認されており、1990 年代後半には豊田市旭町で繁殖が確認されていた。2007 年以降では豊田市猿投地区や下山地区などで繁殖期前後の記録はあるが、繁殖期の確認はされておらず、絶滅の危機に瀕しているといえる。丘陵地や山間部の都市化や道路建設などによる夜間の人工光が増加したことで、餌となる光の影響を受けやすい昆虫類が減少するなど、生息環境が悪化しているものと考えられる。

【保全上の留意点】

生態や繁殖の継続条件などに不明な部分が多いが、本来の繁殖環境である古木の多い社寺林の保存とその餌場となる周辺環境の保全。新しい繁殖環境である山間部の橋梁などでは、安定した巣穴を確保するために巣箱の設置等も効果的と思われる。いずれにしても、餌となる昆虫類の生息環境を保全することは不可欠であると考えられる。

【特記事項】

営巣場所として、古い神社などの古木に空いた樹洞が知られているが、近年は山間部の橋梁や建物での繁殖が多く記録されており、巣箱での繁殖も報告されている。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.101. 文一総合出版, 東京.
飯田知彦, 2001. 人口構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策. 日本鳥学会誌 50 巻 1 号. 日本鳥学会, 東京.

ヤイロチョウ *Pitta brachyura* (Linnaeus)

【選定理由】

県内の確認例は極めて少ないが、春秋の渡りや繁殖期に山間部を中心に生息が確認されている。繁殖期の確認状況から、県内での繁殖はほぼ確実であると推測されるが、正式な繁殖記録は報告されていない。県内における繁殖期の確認数は年によって異なり、0~2 例程度である。全国的にみても分布が局地的で数がごく少ないため、絶滅の危機に瀕していると考えられる。

【形態】

全長 18cm。頭が大きく、体形は寸詰まりに見える。頭部は茶褐色で、黒くて太い過眼線がある。背は光沢のある緑色で、小雨覆と上尾筒はコバルトブルー。胸と腹と脇は黄褐色で、腹中央部から下尾筒は赤い。



静岡県, 2003 年 6 月 21 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

インドから中国南部にかけての東南アジアおよび日本で繁殖し、北方のものは南方に渡って越冬する。日本には、夏鳥として本州中南部、四国、九州に渡来するが局地的で数も少ない。

県内には、数少ない夏鳥として渡来し、山間部および丘陵地に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

針葉樹と広葉樹の混交林に生息する。広島県の例では、傾倒したマツの大木上の地上約 4m の位置に、長野県の例では地上に営巣しており、いずれの例も沢筋に近い急峻な谷の斜面に位置していた。ミミズ類、ムカデ類、クサカゲロウ類、サワガニなどを捕食するとされる。ホッヒー、ホッヒーあるいはポポピー、ポポピーなどと聞こえる声で囀る。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では、豊根村、新城市 (旧鳳来町)、豊田市、岡崎市などの針広混交林で、繁殖期の生息記録があるが、同一場所で毎年継続して確認できた例はほとんど無く、営巣や巣立ちビナなども確認されていない。

【保全上の留意点】

種の保存法により「国内希少野生動植物種」に指定されている。本種の繁殖に適すると考えられる沢筋や山間部の混交林を保全する必要がある。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.112. 文一総合出版, 東京.
上野吉雄, 1999. 中国地方のヤイロチョウの営巣初確認. 日本鳥学会誌第 47 巻第 4 号. pp.139-141. 日本鳥学会, 北海道.

キバシリ *Certhia familiaris* Linnaeus

【選定理由】

現在、県内の確実な繁殖地としては段戸裏谷の原生林が知られるのみである。繁殖環境として標高 1,000m 程度以上で亜高山帯の原生林に限られており、県内にはこの条件を満たす環境がほとんど残されていないことから生息数はきわめて少ない。県内ではその希少な環境と共に絶滅の危機に瀕している種である。

【形態】

全長 13.5cm。上面は褐色で汚白色の斑があり、下面は白い。眉斑は白く、嘴は細く下に湾曲し、尾は長くくさび型。



長野県売木村, 1988年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシアおよび北アメリカ大陸の中緯度地域に広く分布して繁殖・生息し、比較的高緯度で繁殖するのものの中には冬期南下するものもある。日本では、四国以北に分布する。

県内では、東三河地方の山間部の原生林に周年生息するが、ごく局地的である。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本州では主に亜高山帯の針葉樹林に生息し、北海道では平野部でも見られる。本県では、段戸裏谷の原生林に周年生息し、1975年にリョウブの樹洞で営巣が確認された。ピーピョピョ、ツリリ・・・と囀り、地鳴きはツーツリリリッ、シリリッと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

定常的な生息地としては段戸裏谷の原生林が知られるのみで、周年生息し繁殖も確認されている。生息数は多くて2番いと考えられる。冬期もあまり移動しないと考えられているが、繁殖期以外には村積山や六所山、岩屋堂など丘陵地における記録がごく少数ある。繁殖に適した原生林の減少とその周辺の環境悪化が減少の要因であると考えられる。

【保全上の留意点】

県内に残る原生林を周辺の環境を保全し、原生林内外の沢や道路等の整備等を行う場合は環境に及ぼす影響を十分に考慮しなければならない。また原生林内への入山者が増えていることから、必要に応じて立入禁止区域設定等の措置を行って、原生林の自然環境を保全することが必要である。

【関連文献】

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.247. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1996. 段戸裏谷の野鳥. 愛知の野鳥 1996, pp.233-243. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
緒方清人・杉山時雄・矢沢美智子・柿本 浩, 1986. 西三河鳥類目録 1985.12. 西三河野鳥の会, 岡崎.
織田重己他, 2001. 岡崎の野鳥, pp.5. 岡崎野鳥の会, 岡崎.
花井 啓, 1996. 岩屋堂の野鳥. 愛知の野鳥 1996, pp.208-227. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena* (Boddaert)

【選定理由】

冬期に主に三河湾や遠州灘沿岸に少数が生息する。以前は、田原市馬草を中心とする海域で2～5羽が比較的安定して見られたが、近年は記録が途絶えがちで絶滅の危機に瀕している。

【形態】

全長 40～50cm。夏羽は、頭上が黒く頬から喉にかけては灰褐色、頸は赤褐色でよく目立つ。冬羽は、全体的に灰褐色で、頸から脇にかけて汚白色になる。夏羽・冬羽ともに嘴の基部が黄色く、次列風切は白い。

冬羽は、距離が遠い場合、ミミカイツブリ等と混同する可能性があるが、頭部から嘴にかけての輪郭が直線的であること、嘴の形状と色により識別することができる。



愛知県田原市, 1987年4月19日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ヨーロッパ、西シベリア、シベリア東部、北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ、東アジア、北アメリカなどの沿岸部で越冬する。日本では、北海道の湖沼で繁殖し、九州以北で越冬する。

県内では、主に三河湾沿岸部で越冬し、時に遠州灘沿岸部でも観察される。

【生息地の環境 / 生態的特性】

比較的記録が多い馬草海岸を例示すると、冬期でも比較的穏やかな入江的環境で、ノリの養殖が行われており沖合いには藻場が存在する。ハジロカイツブリやカモ類の小群とともに、1～2羽で見られることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内における近年の越冬記録は、田原市（旧渥美町から旧田原町にかけて）の三河湾沿岸部に限られる。1970年代には95羽の群の記録があるが、近年は1997年1月に14羽の記録があるほか毎年1～2羽で推移している。渥美半島の遠州灘海岸でも見られることがあるが、単発的で安定しない。近年は伊勢湾からの記録はほとんどない。

【保全上の留意点】

小型の魚類や水生無脊椎動物を捕食するため、これらの動物を育成する藻場や浅瀬の保全に努める必要がある。

【関連文献】

- 瓜谷 章, 1997. 水鳥調査 in Aichi 1997. 愛知県野鳥保護連絡協議会, 名古屋.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.25. 文一総合出版, 東京.
武内 功, 1977. 愛知県の野鳥, pp.8, pp.80. 愛知県農林部治山課, 名古屋.

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* (Gmelin)

【選定理由】

夏期に平野部のヨシやガマが生える湿地に生息し繁殖するが、数は少ない。1970年代には、鍋田地区や汐川干潟周辺および西三河沿岸部周辺では普通に見られ、内陸のため池等でも希でなかったが、現在は全ての地域で確認が難しくなっている。県内の湿地から最も減少が著しい種のひとつであり、絶滅の危機に瀕している。

【形態】

全長 31～38cm の小型のサギ類。上面が茶褐色で下面は黄白色。飛翔時に茶褐色の雨覆と黒色の風切のコントラストが鮮明。頭上の色は、雄の成鳥では黒く雌の成鳥では赤褐色。幼鳥は、体全体に黒褐色の縦斑がある。



愛知県幡豆郡一色町, 1987年7月26日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

東アジアから東南アジア、インドにかけて、ミクロネシア西部、セーシェル諸島にかけて分布する。日本には主に夏期に渡来し、九州以北で繁殖する。本州中部以西では越冬するものもある。

県内では、夏期に河口部や平野部にある池沼のヨシ原に生息し繁殖する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

ヨシやガマの群落が発達した河口部、埋立地の水たまり、養魚池、ため池などの湿地に生息する。ヨシなどが密生する茂みの中でそれらの茎と葉を用いてお椀のような巣を作る。採餌には繁殖場所の池だけでなく周辺のヨシ原や水田などへ出掛けて魚類、カエル、ザリガニなどを捕食する。ウォツ、ウォツまたはウォーオ、ウォーオと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1970年代に本種が数多く生息していた鍋田地区と汐川干潟周辺からはほとんど姿を消した。近年は、庄内川河口部や矢作川・矢作古川河口周辺のヨシ原、名古屋市周辺など県内平野部の池沼で僅かに生息する。減少の要因は県内全域でのヨシ原面積の減少と、水田の転作による乾燥化で餌となる生物が減少していることがあげられる。繁殖期の天敵であるチュウヒによる捕食圧も高い。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地にある池沼やヨシ原の保全とともに、内陸の池沼でもヨシ原を創出するなど、繁殖環境の復元に努めることが望ましい。水田地帯に隣接した工業団地や住宅団地などの遊水池も、ヨシ原が形成されれば生息が可能となる。遊水池においてはヨシをはじめとする水草の適正な管理が望まれる。

【関連文献】

- 小柳津 弘ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(汐川). 愛知県農林部, 名古屋.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.70-71. 文一総合出版, 東京.
武内 功, 1977. 愛知県の野鳥. pp.11, pp.140. 愛知県農林部治山課, 名古屋.
吉村信紀ほか, 1971-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(鍋田地区). 愛知県農林部, 名古屋.

ミゾゴイ *Gorsachius gossagi* (Temminck)

【選定理由】

夏期に丘陵地から山間部の森林に生息し繁殖するが、目につきにくい種であり生息状況は明らかでない。元来数が少ないことに加え、近年繁殖期の観察例が減少していることから、絶滅の危機に瀕しているものと考えられる。

【形態】

全長 49cm。上面は赤褐色、下面は淡黄褐色で黒褐色の縦斑がある。成鳥の頭上は黒褐色で、後頭に短い冠羽がある。嘴はサギ類としてはかなり短く、目の周囲と目先は水色。幼鳥は頭から体にかけて白色と黒色の虫食い斑がある。



石川県舩倉島, 1999年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

日本には夏期に渡来し、本州、四国、九州で繁殖し、冬期は、南西諸島、台湾、中国南部、フィリピン、モルッカ諸島などで越冬する。サハリン、パラオからも記録がある。

県内では、丘陵地から山間部の森林に生息し、繁殖も確認されている。渡りの時期には、平野部の公園等で記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

沢のある薄暗い混交林に生息し、沢の上など下部に空間のある枝に営巣する。サワガニ、カエル、魚類、昆虫類を捕食する。警戒時には、正面を向き嘴を上を向けて体を真っすぐ伸ばす独特な擬態を行う。夜間にポォーツ、ポォーツと低く太い声で鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

過去に、瀬戸市、豊橋市、田原市、幸田町などの山林で営巣が確認されており、県内各地の丘陵地や山地でも繁殖期の確認記録がある。渡りの季節には名古屋市の鶴舞緑地や豊橋公園など市街地でも記録があるが、近年は県内における繁殖期の観察記録はきわめて少なくなっている。丘陵地や山地の開発や道路建設などにより、餌となるサワガニなどの生物が減少していることが推測される。

【保全上の留意点】

丘陵地から山間部に存在する大小の沢筋がこの種の採餌場所であることが多く、こうした環境を保全する必要がある。開発や道路建設を行う場合は、生息する全ての生物について調査を行って環境を保全する努力が重要であり、既設の道路や開発部分では環境回復の施策が必要である。

【関連文献】

金山洪益ほか, 1976-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(岩屋堂). 愛知県農林部, 名古屋.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.74-75. 文一総合出版, 東京.
武内 功, 1977. 愛知県の野鳥, pp.11, pp.140. 愛知県農林部治山課, 名古屋.

シノリガモ *Histrionicus histrionicus* (Linnaeus)

【選定理由】

冬期に遠州灘の岩の多い海域に生息するが、数はごく少なく局地的である。本県では自然の岩礁地が少なく、加えて生息地に対する人の侵入が増加しており、絶滅の危険性が增大していると考えられる。

【形態】

全長 38～45cm の小型の海ガモ。雄は、頭から上胸および背が青灰色で、嘴基部から目先・頭頂に至る三日月型の白色斑が目立ち、耳部に円形と縦線形の白色斑、胸と背に明瞭な白色帯があり、肩羽の後側頭と脇は赤栗色がある。雌は、全身が黒褐色で、目先の上と耳部に白斑がある。尾は長めで先端が尖る。



北海道羅臼町, 2006年3月5日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

シベリア東部、カムチャツカ、アラスカから北アメリカ西海岸北部と、北千島、グリーンランド南部、アイスランド、アメリカ東部沿岸で繁殖し、ほぼ同じかやや南方の地域で越冬する。日本では、北海道および東北地方で繁殖し、北海道、本州中部以北および九州北部で越冬する。

県内では、冬期に渥美半島の岩礁地及び周辺の海域に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

自然の岩礁がある海域に数羽から 20 羽程度の小群で生息し、甲殻類、貝類、ウニなどを捕食するとされる。田原市(旧渥美町)日出で拾得された個体を解剖し、調査したところ、主にワレカラ(甲殻類)を摂食していた(武田芳男,私信)。岩礁の上で休息する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地は、渥美半島西部の遠州灘沿岸に限られ、総数で 30 羽に満たない。田原市(旧赤羽根町高松一色と越戸、旧渥美町日出)が生息地として知られているが、日出の越冬群は近年見られない。内湾での観察記録は 1965 年の冬期に美浜町で 5 羽、1987 年の冬期に常滑で 4 羽、2008 年の 1 月に幡豆町で 1 羽などの記録があるが、これらは極めて希な記録といえる。本来の生息地である渥美半島では釣り人など岩礁部への人の侵入が増大しており、生息環境が悪化している。

【保全上の留意点】

自然の岩礁が発達した海岸を保全し、生息地に対する人の干渉を制限する必要がある。

【関連文献】

- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.146. 文一総合出版, 東京.
黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.79. 世界文化社, 東京.
原田 進, 1987. 東三河南部の冬鳥 -1985 年 1 月野鳥棲息調査報告書, pp.39. 東三河野鳥同好会, 豊橋.

クマタカ *Spizaetus nipalensis* (Hodgson)

【選定理由】

県内の山間部に周年生息し繁殖するが、生息地は限られており数も少ない。定住性が強く、営巣・採餌に多様で十分な環境が必要であることから、開発圧の影響を受けやすい。近年の研究では繁殖成功率の低下が指摘されており、絶滅の危機に瀕していると考えられる。

【形態】

全長は雄が 70~74.5cm、雌が 77~83cm、翼開長は 140~165cm。上面は全体的に灰褐色、下面は淡褐色で胸に褐色の縦斑、腹には不明瞭な横斑がある。頭上には短い冠羽があり、成鳥の顔は黒褐色で目の色は黄色。飛翔時は、翼が幅広く後縁が膨らんで見える。尾は長めで、太くて明瞭な横帯が 4~5 本ある。幼鳥は、全体的に著しく白っぽく、尾の横帯は細くて数が多い。目の色は黒っぽく見える。



愛知県, 1995年4月15日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

インド南西部、インド東部、スリランカ、ネパールから中国南部、ミャンマー北部、マレー半島北部、タイ、インドシナにいたる地域、台湾、日本に分布する。日本では、北海道、本州、四国、九州の山地に生息し、佐渡、隠岐、対馬でも記録がある。

県内では、主に東部の山間地に周年生息し定住性が強い。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山間部の森林に生息し、急峻な谷を中心に生活する。繁殖地は、営巣と育雛に必要な大径木を含む営巣林が必要であり、行動圏には餌となるヤマドリやノウサギなどが生息する多様な環境が必要である。大型のタカであるが、森林内部での行動も多く、求愛期以外は目にする機会が少ない。また、幼鳥は、巣立ち後もかなり長期間にわたり営巣林の周辺に留まることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息状況は豊根村、設楽町、新城市、岡崎市で繁殖が確認されているほか、豊田市などでも生息が確認されている。長期にわたり維持されている繁殖ペアで、産卵・育雛に至らないものがあり、他県における研究報告にもあるように、本県においても繁殖成功率が低下している可能性がある。

【保全上の留意点】

種の保存法により「国内希少野生動物種」に指定されている。定住性が強く、林地開発や森林施業の影響を受けやすい種である。急峻な谷など生息の可能性がある地区については、生息状況を把握することが望ましい。生息地においては、生息実態を把握して営巣林や巣立ち後の幼鳥の行動範囲など中心的なエリアを特定し、適切な保全と管理を行う必要がある。

【関連文献】

井上剛彦, 2000. 鈴鹿山脈に生息するクマタカの生態に関する知見. *Proceedings of the First Symposium on Raptors of Asia*. pp.189-194.

環境庁自然保護局野生生物課, 1999. 猛禽類保護の進め方 (特に、イヌワシ、クマタカ、オオタカについて). pp.26-33. 東京. 森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.184-194. 文一総合出版, 東京.

Toru Yamazaki, 2000. Ecological Research and its Relationship to the Conservation Programme of the Golden Eagle and the Japanese Mountain Hawk-Eagle. *Proceedings of The First Symposium on Raptors of Asia*. pp.195-210.

チュウヒ *Circus spilonotus* Kaup

【選定理由】

伊勢湾、三河湾沿岸のヨシ原に、主として冬期に生息し一部は繁殖するが数は少ない。繁殖地とねぐらは沿岸部埋立地に形成される広大なヨシ原にほぼ限られており、近年は愛知県内の沿岸部からヨシ原の減少が著しいことから、絶滅の危機はさらに高くなっている。

【形態】

全長 48～58cm、翼開長 113～137cm の中型のタカ。体色は褐色系が基調だが、全身がほぼ暗褐色のものや頭部から胸にかけてクリーム色ものなど、個体差が大きい。中央尾羽の上面が灰色の個体は雄である。雄は体がやや小さく細身であり、雌は大きめで体や翼が太くみえる場合が多い。飛翔形は、翼を V 字型に保ち低空をゆっくり滑翔することが多い。



愛知県西尾市, 2004 年 1 月 10 日, 駒井恒博 撮影

【分布の概要】

バイカル湖周辺とモンゴルから東、アムール川流域、ウスリー地方、日本、ニューギニアに分布し、北方のものは冬期に南下する。日本では、本州以北で局地的に少数が繁殖し、冬期には越冬個体加わり全国で見られる。

県内では、冬期を中心に伊勢湾・三河湾沿岸のヨシ原や農耕地に生息し、少数が繁殖する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

沿岸部のヨシ原を中心に、周辺の農耕地を含む広い行動圏を持ち、主にネズミ類や鳥類、魚類、カエルなどを捕食する。営巣は湿潤なヨシ原内の地上で行われ、ヨシやススキを積み重ねて巣を作り、産座にはイネ科植物など柔らかな草葉を敷きつめる。冬期は、ヨシ原でゆるやかな集団ねぐらを形成する。育雛期はヨシ原で繁殖するヨシゴイやクイナ類のヒナをはじめコアジサシのコロニーにも飛来してコアジサシやチドリ類のヒナなども好んで捕食する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では繁殖期、越冬期に名古屋港周辺や木曾川周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺、豊川河口周辺などで見られる。越冬個体はひとつの罫で数羽から数十羽が観察されている。かつて県内での繁殖は 10 番い程度と推測されていたが、その半数以上を占めていた名古屋港周辺をはじめ西三河、東三河においてもアシ原面積が激減しており、現在では 5 番いを下回っていると推測される。本種の生息には、営巣とねぐらを形成するためのヨシ原、餌場である農耕地や荒地などが一体的に確保される必要があるが、こうした環境は開発の対象となり易い上に植生の遷移、農業形態の変化などにより喪失されやすい。

【保全上の留意点】

沿岸部や河口部、干拓地の水路や埋め立て地などに形成される広大なヨシ原および餌場となる周辺の農耕地の環境を確保することが必要である。

【特記事項】

従前は、ヨーロッパから東アジアにかけて分布するもの全てをチュウヒ *Circus aeruginosus* としていたが、近年、東アジアに分布するものを区分し独立種チュウヒ *Circus spilonotus* としている。

【関連文献】

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.298-325. 文一総合出版, 東京

ハヤブサ *Falco peregrinus* Tunstall

【選定理由】

野生生態系の頂点に位置する種である。採餌方法は飛翔中の鳥類の空中捕獲がほとんどであるが、捕食対象種であるシギ類やチドリ類、カモ類などの生息数は大きく減少している。近年は都市部に多く生息するドバト等を捕食の対象として都市部の人工物で営巣する例も報告されているが、生息に必要な行動圏が極めて広いため、生息数は限られている。

【形態】

雄は全長 38～44.5cm で翼開長 84～104cm、雌は全長 46～51cm で翼開長 111～120cm。成鳥では、頭部、上面、尾羽は黒味の強い青灰色で、下面は白く胸から腹、脇、脛にかけて細かい横斑がある。頬には髭状の黒い斑があり、目の周辺に黄色の縁取りがある。幼鳥では、頭部、上面、尾羽が暗褐色で各羽に淡褐色の羽縁があり、下面には明瞭な縦斑がある。飛翔時は、翼先端が尖って見え、浅くて早い羽ばたきと滑翔を交互にしながら直線的に飛ぶことが多い。



愛知県, 1990年4月22日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

南極圏を除き広く世界中に分布する。亜種の種類は研究者により異なるが、17～19 亜種に分けられることが多い。国内の記録は、ロシア北東部で繁殖するシベリアハヤブサ *F. p. harterti*、日本で繁殖するハヤブサ *F. p. japonensis*、アリューシャン列島等で繁殖するオオハヤブサ *F. p. pealei*、北硫黄島等で繁殖するシマハヤブサ *F. p. furuitii*、の4 亜種が記載されている。県内では、沿岸部の限られた地域に生息し繁殖する。冬期は、平野部の水辺を中心に県内各地で記録がある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

海岸などの高い崖で繁殖するが、近年は都市部にある建造物での繁殖も確認されている。沿岸部を主な生息地とするが、山間部で観察されることもある。冬期は平野部を中心に生息し、河川や海岸などの開けた水辺に群れるカモ類、農耕地に群れるハト類や小鳥等を捕食する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での繁殖は、1996 年に初めて確認された。現在県内では繁殖期に 4～5 番い程度の生息が確認されており、都市部のものは人工建造物に営巣して主にドバトなどを捕食している。県内で繁殖の確認がされる例は少なく、繁殖できなかった例が大半を占める。越冬期の生息数には増加傾向がみられず、本来の餌であるカモ類やシギ類、チドリ類などの減少がこの種の生息数に関与しているものと考えられる。

【保全上の留意点】

種の保存法により「国内希少野生動物種」に指定されている。繁殖に適した崖・岩場の保全や人工建造物での営巣地の管理が必要と考えられるが、餌となるシギ類・チドリ類やカモ類などの生息環境の保全も重要である。

【特記事項】

本県では、亜種ハヤブサ *F. p. japonensis* に加え、オオハヤブサ *F. p. pealei* の記録がある。

【関連文献】

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.338-355. 591-593. 文一総合出版, 東京.

コシャクシギ *Numenius minutus* Gould

【選定理由】

年により飛来数に増減があり、近年は全く飛来の確認ができない年の方が多い。春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部を中心とした水田や畑地、草生地などに渡来するが、数はごく少ない。県内沿岸域の生息環境は悪化しており、近年の飛来記録も 2004 年 4 月以降途絶えていることから、初版絶滅危惧 II 類から絶滅危惧 I B と評価された。

【形態】

全長 29～32cm。上面は黄褐色または褐色で、暗褐色の軸斑がある。頭中央線は淡黄褐色、両側の頭側線は黒褐色、黄褐色の幅広い眉斑がある。暗褐色の過眼線があるが目先の部分は不明瞭で嘴まで至らない。腰から上尾筒にかけては、黒褐色の横斑があるため飛翔時に一様に見える。チュウシャクシギと比較して嘴はかなり短く、やや下に湾曲する。



愛知県西尾市, 1999 年 4 月 21 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

シベリア東部で繁殖し、東部インドネシア、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に少数が渡来する。九州地方で記録が比較的多い。

県内では、春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の農耕地や草地に渡来する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は 4 月から 5 月、秋期は主に 9 月から 10 月にかけて、水田や畑地、草生地などに単独から数羽で生息し、昆虫などを捕食する。クイツ、クイツ、クイツと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

種の保存法で「国際希少野生動植物種」に指定されている。県内においては、1970 年以降、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺を中心に約 25 例の観察記録がある。1999 年春期は、西尾市で 7 羽、汐川干潟周辺で 4 羽、そのほか岡崎市内で記録されたが、全く記録されない年も多い。沿岸部の農耕地や草地は減少しており、生息条件が悪化している。

【保全上の留意点】

沿岸部の農耕地や草地を保全する必要がある。

【特記事項】

本州中部以東では観察記録の少ない種であり、九州以西では比較的多くの記録があるが、年による増減が大きい。1996～1998 年の春期と秋期に、国内延 336 箇所で行われたシギ・チドリ類のカウント調査における本種の全国総数はシーズン最大 34 羽（1998 春期）であり、全国的にも数少ない種といえる。ただし、1999 年春期は、九州地方で 100 羽を超える群が見られている。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.241. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.137. 世界文化社, 東京.

ズグロカモメ *Larus saundersi* (Swinhoe)

【選定理由】

東アジアだけに分布し、中国東部沿岸に限られた地域だけで繁殖する希少種で、国際的に絶滅の危機に瀕している。県内では、伊勢湾・三河湾の干潟で毎年少数が越冬する。

【形態】

全長約 29～32cm、翼開長 87～91cm。夏羽は、頭部が黒く眼の周りに白い縁どりがあり冬羽では頭部が白く頬と頭頂に黒い斑がある。足は黒味を帯びた赤色で、嘴は黒くユリカモメに比べて太く短い。静止時は、成鳥の場合、翼先端が白と黒の斑状に見える。幼鳥は、成鳥冬羽に似るが、三列風切などに茶褐色味があり、翼先端は白と黒の斑状に見えない。飛翔時は、翼下面（外側初列風切）の黒斑がよく目立つ。



愛知県豊橋市, 1985年12月16日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

中国の渤海沿岸と黄海沿岸で繁殖し（韓国北西部でも営巣の記録がある。）、冬期は、中国南西部、台湾、韓国、日本の南西部で越冬する。日本国内の主要な越冬地は、有明海、八代海、周防灘の干潟があげられる。本州中部以西では少ない。

県内では、伊勢湾と三河湾の干潟に少数が定期的に渡来し越冬する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に干潟に生息し、汀線をゆったり飛び、カニ類やゴカイ類などの底生動物を捕食する。県内の生息地では、単独または数羽で行動することが多く、ユリカモメ群中で見られることもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では、1980年代半ばから定期的に越冬するようになり、汐川干潟、庄内川河口・藤前干潟、飛鳥干潟で各々数羽から10羽程が越冬する。このほか、矢作川河口、豊川河口、伊川津などの干潟でも年により1羽から数羽が越冬する。本種の主要な越冬地は有明海や周防灘など主に九州の干潟であり、本県の干潟は中部地方の数少ない越冬地として貴重である。繁殖地の環境悪化が指摘されており、絶滅の危機に瀕していると考えられる。

【保全上の留意点】

世界的な希少種であり、干潟や河口部の湿地を保全し、越冬環境の確保に努める必要がある。

【特記事項】

世界的に見て分布が局地的で数も少なく、推計個体数が5,000～8,000羽と見積もられている。

【関連文献】

- 瓜谷章, 1999. 水鳥調査 in Aichi 1998. 愛知県野鳥保護連絡協議会, 名古屋.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.267. 文一総合出版, 東京.
花輪伸一, 2000. 佐藤正典編. 有明海の生きものたち 干潟・河口域の生物多様性, pp.253-265. 海游舎, 東京.

ヤマセミ *Ceryle lugubris* (Temminck)

【選定理由】

山間部の河川やダム湖などに周年生息して繁殖し、冬期には平野部でも見られることがある。以前は山地の河川で比較的容易に観察することができたが、2006年以降の調査では、県内における繁殖期の生息数は庄内側水系で0～数番い、豊川水系で1～数番い、矢作川水系で4番い程度であり、県内での繁殖数は10番い以下に減少しているものと推測された。繁殖期以外の観察数も減少しており、平野部での確認報告は無くなっている。絶滅が危惧されることで、初版の絶滅危惧Ⅱ類から絶滅危惧ⅠB類と評価された。

【形態】

全長 38cm。頭部から背、尾にかけての上表面は白黒のかのこ模様で、下面は白い。嘴は黒く、冠羽がある。雄は、胸に橙褐色と黒色の斑があり下雨覆は白い。雌は、胸の斑が黒色だけで下雨覆は橙褐色。



愛知県豊田市, 1986年11月8日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

アフガニスタン北東部からヒマラヤ、タイ北西部、ミャンマー、ベトナム中部、中国南部に分布し、日本には、九州以北に分布する。県内には、山間部の河川や湖沼に周年生息し、冬期には平野部で記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山間部の河川、溪流、ダム湖などに広いなわばりを持ち周年生息する。水中に飛び込んで魚類を捕食し、川沿いの土手に横穴を穿って営巣する。飛びながら、キャラッ、キャラッ、ケレレレ等と鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

渓谷や河川、湖沼など山間部の水辺環境悪化で餌となる魚の減少が考えられるとともに、営巣場所となる土質の崖が喪失している。カーブミラーに映る姿を敵と見做して衝突する例も観察されている。

【保全上の留意点】

減少の最も大きな要因として、県内から営巣環境となる土質の高い崖が無くなったことがあげられる。繁殖中に巣穴のある崖が、モルタルの吹き付けで埋められてしまった例もある。人間生活の安全確保は全てに優先されるべきであるが、全て一律な方法でなく、各環境に生息する生物にも配慮して、共存を前提とした管理や工法が実施されるべきである。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.93. 文一総合出版, 東京.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.183. 世界文化社, 東京.

オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* (Bechstein)

【選定理由】

現在、県内の繁殖地としては段戸裏谷の原生林と茶臼山が知られるのみで、分布が局地的で数がごく少ないため、絶滅の危機に瀕している。

【形態】

全長 28cm。上面は黒色で背から翼にかけて白斑があり、下面は淡黄白色で腹と下尾筒は淡い赤色。側胸と脇には、黒褐色の縦斑がある。雄は頭頂が赤く、雌は黒い。体は、類似種のアカゲラよりもひと回り大きい。



滋賀県大君ヶ畑, 1988年5月14日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

小アジア、コーカサス、ヨーロッパ西部からバイカル湖を経てロシア沿海地方、サハリン、朝鮮半島、中国、台湾に分布する。日本では、北海道、本州、四国、九州、奄美大島に留鳥として生息する。

県内では、東三河地方の山間部の原生林に周年生息するが、ごく局地的である。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本州では山地の森林に生息し、北海道では平野部でも見られる。本県では、東三河地方山間部の原生林に周年生息し、樹木に横穴を穿って営巣する。キョツ、キョツと鳴くことが多いが、ケレレレ・レ・レという声も発する

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内で繁殖期に毎年確認されているのは段戸裏谷のみ、他に面の木の原生林や茶臼山で少数の記録あるのみであり、繁殖は局地的であるといえる。繁殖期以外でも県内での生息数は極めて少なく、冬期や秋期に猿投山、平和公園などで僅かに記録されている程度である。県内の原生林は極めて限られており、その環境は悪化している。

【保全上の留意点】

現存する原生林を保全し、中長期的には新たに創出していくことが望ましい。

【関連文献】

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.109. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1974-1998. 野生鳥類生息調査報告書(段戸裏谷). 愛知県農地林務部, 名古屋.
蒲谷鶴彦・松田道生, 1996. 日本野鳥大図鑑 鳴き声 333(上), pp.195. 小学館, 東京.
名古屋の野鳥 名古屋市野鳥生息状況調査報告 1989.4-1990.3, 1990. pp.45. 名古屋市農政緑地局管理部農政課, 名古屋.
原田猪津夫, 1983-1998. 野生鳥類生息調査報告書(茶臼山). 愛知県農地林務部, 名古屋.

マミジロ *Turdus sibiricus* Pallas

【選定理由】

県内の確実な生息地としては段戸裏谷と面の木峠、茶臼山が知られるのみであるが、近年は茶臼山以外での記録は途切れがちである。分布が局地的で数がごく少ないため、絶滅の危機に瀕している。

【形態】

全長 23.5cm。雄は全身が黒色で、白くて明瞭な眉斑がある。雌は上面がオリーブ褐色で、下面は白く、細い眉斑がある。



長野県売木村, 1987年6月4日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

中国北東部からロシア極東南部、サハリンにかけて繁殖し、冬期は中国南部、東南アジアで越冬する。日本では、夏期に本州中部以北の山地に生息し繁殖するが局地的である。

県内では、東三河地方山間部に生息するが、ごく局地的である。春秋の渡り時期には、市街地の公園などで記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本州中部では、標高 700~1,500m の広葉樹林や針広混交林に生息し、地上でミミズ、昆虫を捕食するほか、樹上で木の実を食べる。茂みに覆われた樹枝上に、草の茎、枯れ枝でわん形の巣を作る。キョロンツリィー、キョロンツリィーと轉り、地鳴きは、キョッ、キョッと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

定期的な生息地としては段戸裏谷、面の木峠、茶臼山の原生林が知られるのみであり、繁殖も確認されているが、生息数はごく少なく生息の確認は安定しなくなっている。

【保全上の留意点】

県内に残る原生林を周辺の環境と共に保全し、原生林内外の沢や道路等の整備等を行う場合は環境に及ぼす影響を十分に考慮しなければならない。また原生林内への入山者が増えていることから、必要に応じて立入禁止区域設定等の措置を行って、自然環境を保全することも必要である。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. pp.182. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1974-1998. 野生鳥類生息調査報告書(段戸裏谷). 愛知県農地林務部, 名古屋.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.222. 世界文化社, 東京.
原田猪津夫, 1983-1998. 野生鳥類生息調査報告書(茶臼山). 愛知県農地林務部, 名古屋.
原田 進, 1981. 東三河野鳥生息状況調査報告書(1). 東三河野鳥同好会, 豊橋.

オオセツカ *Locustella pryeri* (Seebohm)

【選定理由】

日本に分布する亜種の繁殖地は関東以北の本州にあり極めて限られていて国の絶滅危惧 I B 類に指定されている。県内では沿岸部の埋立地や河川敷のヨシ原で、冬期や渡りの季節に確認されているがその数は極めて少ない。愛知県はこの種の越冬地として、あるいは繁殖地にもなり得る地理的条件にありながら繁殖記録が無いだけでなく、越冬期をはじめとする非繁殖期の記録も極めて少ないことから絶滅の危機に瀕しているといえる。

【形態】

全長 13~14cm。上面は茶褐色で、背に黒褐色の太い縦斑がある。眉斑は白くて細く、尾はくさび型で長い。



茨城県, 1985年7月15日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ウスリー、中国東北部で繁殖し、中国中部で越冬する。ロシア、中国と日本に分布する2亜種が知られ、日本では、東北地方及び関東地方で繁殖するが局地的である。冬期には、本州中南部から四国でも記録がある。

県内には、数少ない冬鳥として渡来しており、沿岸部のヨシ原などに生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に海岸近くの湿地や埋立地のヨシ原などに生息するが、草の中に潜行しているためほとんど目にする機会はない。繁殖地では、ジュククク、キュルルル・・・と囀りながら飛翔する。地鳴きは、トゥック、トゥックと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息状況は必ずしも明らかでないが、古くに鍋田地区で、近年では矢作川河口周辺など三河湾沿岸の埋立地のヨシ原で記録があり定期的に越冬しているものと考えられる。主要な生息地であるヨシ原は、土地利用による喪失あるいは植生遷移による縮小が顕著になっており、絶滅の危機に瀕しているものと考えられる。

【保全上の留意点】

種の保存法により「国内希少野生動植物種」に指定されている。沿岸部や河口部の干拓地や埋立地に広がるヨシ原を将来的に確保・保全していくとともに、県内における生息状況をより明らかにしてこの種の生息環境の保全をはかることが重要である。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.202. 文一総合出版, 東京.

クロサギ *Egretta sacra* (Gmelin)

【選定理由】

県内での正確な繁殖記録は無いが島嶼において繁殖の可能性も否定できない。主に非繁殖期遠州灘や三河湾の岩の多い海岸に生息するが、数はごく少なく確認場所も安定していない。本県では自然の岩礁が少なく、加えて生息地に対する人の侵入が増加しており、絶滅の危険性が增大していると考えられる。

【形態】

全長 58～66cm。全身がすすけた黒色で、他のサギ類に比べて嘴は太めで足は短い。嘴と足は黄色。南西諸島以南には、全身が白色のタイプが生息するが、本県では白色のタイプは見られていない。



愛知県幡豆郡吉良町, 1995年8月14日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

東アジア、東南アジア、オーストラリア、ミクロネシアに分布する。日本では、太平洋側では房総半島以西、日本海側では牡鹿半島以南で繁殖し周年生息するが、一部は冬期に移動するとされる。

県内では、主に冬期に遠州灘の沿岸部や三河湾の島嶼部で確認され、稀に内陸部の湿地でも記録される。

【生息地の環境 / 生態的特性】

自然の岩礁が発達した海岸に生息し、魚類、カニ類、貝類を捕食する。海岸の岩棚や樹上に営巣するが、県内での繁殖は確認されていない。飛ぶ時に、グアッと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地は、渥美半島西部の遠州灘沿岸部と知多半島南部から三河湾島嶼部にかけての岩礁地が知られるが、数はごく少ない。また、近年は、沖合いの岩礁部への人の侵入が増大しており、生息環境が悪化していると考えられ、実際に釣り糸による被害例がある。記録の大半は冬期のものだが、三河湾の島嶼部で夏期の記録があり繁殖の可能性も否定できない。

【保全上の留意点】

海岸の岩礁部を保全し、生息地に対する人の侵入は厳に慎むべきである。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.89. 文一総合出版, 東京.
吉井 正, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.55. 世界文化社, 東京.

トモエガモ *Anas formosa* Georgi

【選定理由】

冬期に河川や内陸の池沼に生息するが、数は少ない。東アジア特産の希少種で、本県においては、かつて尾張地域で数千から1万羽を超える大群が見られたが、近年はこのような大規模な群は見られず、絶滅の危険性が增大していると考えられる。

【形態】

全長39～43cmの小型のカモ。雄は、顔に黄白色と光沢のある緑色からなる巴型の模様があり、側胸に白い縦線がある。肩羽は細長く伸び、脇にまで達する。雌は、全身が灰褐色で嘴基部に丸い斑があり、喉から頬にかけて白色部がある。



東京都, 1986年3月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

東アジア特産種で、シベリア極東部で繁殖し、中国東部、朝鮮半島、日本で越冬する。日本国内では、日本海側で多くそのほかの地域では少ない。近年、韓国において新たに大規模な越冬群が発見された。

県内では、冬期に河川や池沼に少数が生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

大きな河川や灌漑用の調整池などに生息するが、山間部の河川でオシドリの群れに混じることもある。主に植物食で、ドングリや草の種子などを好むが、越冬中の生活史は明らかでない。大規模な越冬群の渡来地は局所的で、かつ個体数の年変動が大きい。密集した群でまとまりのある行動をとること、警戒心が強く捕食者や人の侵入による攪乱の影響を受けやすいことから、同一の越冬シーズン中でも個体数が安定しないとされる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

庄内川河口や木曾川下流では年により数百羽の群が見られることがあり、大平洋側の数少ない集団越冬地として重要である。内陸の池沼においては、1羽から十数羽が見られるに過ぎない。かつては、木曾川下流域で2～3万羽、愛知池で5千羽の記録があり、減少したと考えられるが原因は明らかでない。繁殖地のロシア、日本国内の主要な越冬地で個体数の減少が報告されている。

【保全上の留意点】

河川や池沼などの水辺環境を保全し、安定して越冬できる環境の整備に努める必要がある。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.119. 文一総合出版, 東京.

山本浩伸・大畑孝二・桑原和之・矢田新平, 2000. ロシアから渡来するカモ - トモエガモ -, Birder 第14巻 第10号, pp.40-43. 文一総合出版, 東京.

Miyabayashi, Y. and Mundkur, T. 1999. Atlas of Key Sites for Anatidae in the East Asian Flyway. Wetlands International, Kuala Lumpur.

ビロードキンクロ *Melanitta fusca* (Linnaeus)

【選定理由】

冬期に遠州灘や三河湾の海域に生息するが、数はごく少ない。1980年代半ばまでは稀ならず見られ越夏群も確認されていたが、近年は全く記録されない年もある。個体数と記録頻度がともに大きく減少し、絶滅の危険性が増大している。

【形態】

全長 51～58cm。雄成鳥は、全身が黒色で背にビロード光沢があり、目の下には三日月型の白斑があり、嘴は赤くて上嘴の基部にこぶ状の突起がある。雌は、全身が黒褐色で目の前と頬の2ヶ所に白い斑があり、嘴は黒色。次列風切と大雨覆いが白く、飛翔時はよく目立つ。



愛知県田原市, 1987年8月18日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

北ヨーロッパからシベリア中部で繁殖しヨーロッパ沿岸で繁殖する亜種、シベリア東部からカムチャッカで繁殖し日本、朝鮮半島南部、中国沿岸で越冬する亜種、およびアラスカからカナダ中部で繁殖し、北アメリカ沿岸部で越冬する亜種の3つに分けられる。日本国内では、冬期に九州以北の大きな湾や外洋沿岸に生息する。

県内では、冬期に遠州灘や三河湾の海域に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に遠州灘や三河湾の沖合いに生息し、稀には、汐川干潟、豊川河口、矢作川河口などの三河湾深部でも記録がある。潜水採餌をし、貝類や甲殻類を捕食するとされる。三河湾田原町沿岸の越夏個体群は、岸に上がっていることも多かった。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1970年代には、冬期に三河湾の田原市(旧田原町)沖で1,000羽以上、内海で50羽の群の記録があり、1950年代には矢作川河口でも336羽の記録がある。1980年代半ばまでは遠州灘で沖合い遠くを飛翔する様子がよく見られた。また、1973年7月に白谷海岸で29羽の越夏群の記録がある。以上から、かつては本県の海域で普通に見られたと考えられるが、近年は、三河湾や遠州灘の沿岸で1～数羽が稀に記録されるに過ぎない。

【保全上の留意点】

餌となる貝類や甲殻類を確保するため、干潟や浅瀬など海域環境の保全に努める必要がある。

【関連文献】

- 小柳津 弘, 1987. 田原町裏浜(片浜-宇津江境)の野鳥. 伊良湖 No.18. pp.11. 伊良湖自然科学博物館, 渥美町.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.144. 文一総合出版, 東京.
黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.78. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物(野鳥), pp.250. 西尾市史編纂委員会, 西尾.

カワアイサ *Mergus merganser* Linnaeus

【選定理由】

県内では、主に冬期に尾張地方平野部の大型河川中下流域に生息し、その他の場所での記録は極めて稀である。分布が局地的で数が少なく近年はさらに生息数が減少していることで、初版準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 58～72cm。雄は、頭部が緑光沢のある黒色で、後頭にふくらみがあり、嘴は赤色で細長く先端がかぎ状にまがる。上頸から腹にかけては白色でサーモンピンク色を帯びる。背は黒色で、肩羽、雨覆、次列風切は白色で初列風切は暗灰色。雌は、頭部が茶色で後頭に冠羽があり、喉から胸にかけて白色で上面は灰色。



岐阜県川島町, 1989年1月15日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部及び北アメリカ大陸の亜寒帯と温帯の一部で繁殖し、ヨーロッパ、中近東、インド南部、ミャンマー、中国南部、北アメリカで南部で越冬する。日本では北海道に周年生息し繁殖するほか、本州、四国、九州では、冬期に湖沼や河川に生息する。

県内では、冬期に主に尾張地方平野部の河川に生息し、稀に県内各地の大きな池沼や海上でも記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期、大きな河川や湖沼で数羽から数十羽の群を作り生息する。巧みに潜水し魚類を捕食し、時には共同で魚群を追うこともあるとされる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地は、木曾川の中下流域に限られ、個体数も1990年代半ばまでは県内全体で100～200羽程度が観察されていたが、近年は数十羽程度に減少している。減少の要因として高速道路建設等により河川および河川敷の環境が悪化したことが挙げられる。

【保全上の留意点】

河川や池沼など水辺環境を保全し、安定して越冬できる環境の整備に努める必要がある。

【関連文献】

- 瓜谷 章, 1994-1998. 水鳥調査 in Aichi 1994-1997. 愛知県野鳥保護連絡協議会, 名古屋.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.155. 文一総合出版, 東京.
黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.82. 世界文化社, 東京.
後藤義夫, 1972-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(木曾川, 葛木, 玉ノ井). 愛知県農林部, 名古屋.

ハチクマ *Pernis apivorus* (Linnaeus)

【選定理由】

夏期に平地に面した丘陵地から標高の高い山地までに生息し繁殖するが数は少ない。繁殖期の行動圏が他のタカ類に比較してかなり広いことで生態を把握することが難しく、育雛期以降の餌をハチ類の幼虫に大きく依存していることや、人里近くの林に生息することで開発等の影響を受けやすいことなどから、絶滅の可能性が増大しているものと考えられる。

【形態】

全長は 57～60.5cm、翼開長 121～135cm の比較的大型のタカ。翼は長くて幅広い。羽色は、淡色型、中間型、暗色型とバリエーションがあり、さらに雌雄や年齢で異なるため複雑である。基本的には、尾羽と風切の横帯が雄成鳥の場合は太く明瞭で、雌成鳥または幼鳥の場合は細くあまり目立たない。目の色は、雌成鳥の場合は黄色で、雄成鳥または幼鳥の場合は暗褐色であることが多い。幼鳥は、飛翔時に初列風切の先端部が広く黒色に、次列風切が暗色に見える。



愛知県知多郡美浜町, 2005年10月9日, 駒井恒博 撮影

【分布の概要】

ヨーロッパから小アジア、バイカル湖を経てロシア東北部、中国東北部、日本、インドから東南アジアにかけて繁殖し、アフリカ、東南アジアで越冬し、全 6 亜種に分けられる。日本では、北海道、本州、四国、九州に夏期に渡来し繁殖する。

県内では、夏期に丘陵地から山間部に生息し繁殖する。春秋の渡り季節には平野部でも見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本州には 5 月上旬に渡来し、9 月から 10 月にかけて越冬地へ渡去する。主な生息地は針広混交林を含む丘陵地で、アカマツやナラ類などの樹上に営巣し通常 2 卵を産む。ハチ類の幼虫を好んで餌とすることで知られており、ハチ類の巣の少ない渡来当初は主にカエルやヘビなどの小動物を捕食する。近年人工衛星による追跡で渡りのコースや時期などが明らかにされており、渡りを含めこの種の生活がハチ類に大きく関わっていることが解明されつつある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張、西三河、東三河の丘陵地で少数の繁殖が確認されているほか、茶臼山周辺などの山間部でも繁殖期の記録がある。元来数が少ないことに加え、育雛期の餌の多くをハチ類に依存しており、人里近くに生息するため林地開発等の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

繁殖期に観察される地区を中心に、県内における生息状況を調査する必要がある。繁殖地においては、行動圏と生態を把握したうえで、中心的なエリアや餌場エリアを保全し適切に管理することが望ましい。

【特記事項】

ユーラシア大陸西部に生息するものをヨーロッパハチクマ *Pernis apivorus*、東部および東南アジア、日本に生息するものをハチクマ *Pernis ptilorhyncus* と別種に扱う説がある。

伊良湖岬では、秋の渡り時期にシーズン計約 500 羽が通過する。

【関連文献】

伊良湖岬の渡り鳥を記録する会, 2000. 伊良湖岬のタカの渡り. タカの渡り 2000, pp.36-46. タカの渡り全国集会 in 信州実行委員会, 長野.

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.22-39. 文一総合出版, 東京.

サシバ *Butastur indicus* (Gmelin)

【選定理由】

夏期に丘陵地から山間部の林に生息し繁殖するが数は少ない。かつては繁殖期に県内全域の山地や丘陵部の里山環境で普通に見られたが、近年は知多半島をはじめ丘陵部での繁殖が消滅あるいは激減している。伊良湖岬では、秋期の渡り時期に当地を通過する個体数が1990年から減少している。

【形態】

全長47～51cm、翼開長102.5～115cm。翼は長くてやや細い。成鳥は、頭から背にかけて赤みのある褐色で、腹に茶褐色の横斑、喉の中央に明瞭な縦線が1本あり、目は黄色。雄成鳥は、頭部に灰色味が強い。幼鳥は、上面に赤味がなく胸から腹にかけて縦斑、汚白色の太い眉斑があり、目は暗褐色。飛行時の下面は白っぽく、翼がやや細めに見え、尾羽に横帯、風切に横斑がある。



愛知県知多郡美浜町, 2005年10月7日, 駒井恒博 撮影

【分布の概要】

アムール地方南部、ウスリー地方、中国東北部、朝鮮半島北部、および日本で繁殖し、南西諸島、台湾、中国南部、ミャンマー、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、マルク諸島、ニューギニアなどで越冬する。国内では、北海道を除く全国で繁殖し、南西諸島では少数が越冬する。

県内では、夏期に丘陵地から山間部に生息し繁殖する。秋の渡り時期には平野部でも見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本州には3月下旬に渡来し、9月から10月にかけて越冬地へ渡去する。平地から低山帯に生息し、アカマツ林を含む雑木林またはスギ・ヒノキの植林地などで繁殖する。水田、畑、湿地、伐採跡地などの開けた土地で狩りを行うことが多く、谷に田が入り込んだ里山環境を主な生息地としている。主に、カエル、ヘビ、トカゲ、昆虫類を捕食し、ヒミズ、ネズミ、鳥類を採ることもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内全域の山地や丘陵地で繁殖していたが、近年知多半島や平野部に近い丘陵地では繁殖が確認されなくなっている。繁殖に必要な里山環境が、水田の耕作放棄や転作により餌となる両生類や爬虫類が減少していること。県内の丘陵部全般に展開されている高速道路建設や大規模開発などにより、生息できる環境が喪失していることが減少の要因である。

【保全上の留意点】

県内に残る丘陵部、山間部の里山環境を保全することが急務である。農林業の後継者を育成し振興をはかる政策が重要である。

【特記事項】

かつては知多半島でも繁殖していたが、現在は県内全域で丘陵部からの繁殖記録が無くなる傾向にある。かつて伊良湖岬では、秋の渡りで14,000羽の通過が確認されたが近年は半減している。

【関連文献】

伊良湖岬の渡り鳥を記録する会, 2000. 伊良湖岬のタカの渡り. タカの渡り 2000, pp.36-46. タカの渡り全国集会 in 信州実行委員会, 長野.

辻 淳夫, 1990. 伊良湖岬でのタカと小鳥の渡り. 日本の生物 第4巻 第6号, pp.22-29. 文一総合出版, 東京.

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.172-183. 文一総合出版, 東京.

ウズラ *Coturnix japonica* Temminck et Schlegel

【選定理由】

春秋の渡りの季節に平野部の農耕地で記録されており、沿岸部の農地で越冬するものが確認されているが数は少ない。東三河地域では養殖が行われているため、籠脱け個体が確認される可能性を疑う必要があるが、西三河以北で確認されているものに関しては確認の季節やその生態等を総合して野生種と認められる。愛知県では元来生息数の少ない種であるが、近年は特に生息場所の環境が悪化しており絶滅が危惧されることで、初版の情報不足から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 20cm。上面は淡赤褐色で黒色と淡黄褐色の横斑と縦斑がある。下面は淡黄褐色で、胸と脇に赤茶色と黒色の縦斑がある。雄は、眉斑が黄白色で頬と喉が赤褐色。雌は、眉斑が淡黄色で頬と喉が白っぽい、上胸に2本の黒帯がある。



愛知県西尾市, 1998年3月3日, 木村 勝 撮影

【分布の概要】

モンゴル北部、バイカル湖、アムール、ウスリー、中国北部で繁殖し、冬期は朝鮮半島、中国南部、インドシナに生息する。8亜種に分けられる。日本では、本州中部以北で繁殖し、冬期は本州中部以南に生息する。

本県では、渡りの季節と冬期に主に平野部の農耕地で記録される。

【生息地の環境 / 生態的特性】

草原、牧草地、河川敷、農耕地などに生息する。飛び上がることが少なく、草むらの中に潜入していることが多いので観察が難しい。秋の渡りの季節や越冬期は採餌の時以外に開けた場所へ出ることが少ないが、春の渡りでは比較的開けた場所へ出ることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

弥富市や刈谷市、岡崎市、碧南市、西尾市、一色町など沿岸部を中心に平野部の農耕地で年により見られたが、近年は観察報告がかなり少ない。丘陵地や山間部でも単発的な記録がある。元来数が少なく、加えて減少傾向にあると考えられる。農業の大規模集約化や河川敷整備などにより、多彩な植生環境が消失していることが減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

県内のみならず国内における野生個体の生息数がかなり少ない種であることから、現在、期限を定めて捕獲が禁止されているが、早急に狩猟鳥の指定から除外することが望ましい。

【特記事項】

特に東三河平野部では、養殖のウズラが野外で見つかる可能性があるため、記録の取り扱いには注意を要する。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.59. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.100. 世界文化社, 東京.

ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus)

【選定理由】

夏期に平野部から山地の淡水湿地に生息し繁殖する。かつては、県内平野部の各地で普通に見られたが、都市化の進展、水辺環境や水田を含む湿地環境の環境悪化、喪失に伴い生息に適した環境が少なくなり、数が減少した。

【形態】

全長 21～23cm。成鳥は、頭部から腹にかけて赤褐色、上面は一様な暗緑褐色で、下尾筒は黒色地に白色の横斑がある。嘴は黒く脚と目は赤色。幼鳥は、全体的に羽色が淡く、喉から腹にかけては白っぽい。



愛知県刈谷市, 1987年6月7日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

インドから東南アジア、中国、朝鮮半島にかけて分布し4亜種に分けられる。北方のものは冬期に南下する。日本には2亜種が分布し、亜種ヒクイナ *P. f. erythrothorax* は、北海道、本州、四国、九州に主に夏期に生息し繁殖するが、冬期は南に渡り、一部は本州中部以南で越冬する。南西諸島には亜種リュウキュウヒクイナ *P. f. phaeopyga* が周年生息する。

県内では、主に夏期に平野部に生息し繁殖する。丘陵地や山間部でも記録がある。稀に越冬する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

夏期に平地から低山の休耕田や湿田、河川や池沼の畔水田などの淡水湿地に生息する。繁殖期は5月から9月で、イネ科の株の中などに営巣する。なわばり性で主に単独か番いで生活し、水生昆虫や軟体動物、水生植物の若葉などを採食する。繁殖期には、キョツ、キョツ、キョツ・・・と続けて鳴き、途中でテンポが早くなる。近年は都市部の遊水池や水路にできた小面積のアシ原で、繁殖期の生息が確認されることもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては、県内の平野部広くで普通に見られ各地で繁殖記録があったが、近年は、特に尾張地域では姿を見ることが難しい程にまで減少し、西三河地域の水田地帯においても繁殖記録は希である。山間部における生息状況は明らかでないが、数は少ないものと考えられる。都市化の進展や水田の乾田化などに伴い、生息に適した環境が少なくなり個体数が減少した。

【保全上の留意点】

水田を含む淡水湿地を保全し、水辺の自然性回復に努める必要がある。都市化の進んだ地域では、小面積の遊水池や水路でもアシ原が形成されれば繁殖が可能である。こうした事実を見逃さず適正な生息環境の保全を行うことができれば、他のアシ原に依存する多くの生物と共にこの種の絶滅を防ぐことは可能である。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.170. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.106. 世界文化社, 東京.

タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus)

【選定理由】

県内平野部の淡水湿地、主に水田に生息し繁殖するが数は少ない。その大半が夏鳥であり一部は越冬している。農業政策の変更で水田が休耕でなく、麦や大豆への転作による乾田化により水田の土壌生物や水生生物の生態系が崩れたこと、さらに都市化や道路建設等により生息に適した環境が消失しており、絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 23～28cm。成鳥雄は、頭部から上面は暗褐色で黄褐色の頭中央線があり、目の周辺にはまが玉型の黄褐色の斑がある。肩から背にかけて黄褐色の線、肩から胸にかけて太い白線がある。成鳥雌は、目の周辺の斑が白色で、顔から上胸が赤褐色、上面は暗緑褐色で下面が白く、雄に比べて鮮やかである。



愛知県幡豆郡一色町, 1986年8月14日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

インドから東南アジア、中国、アフリカ、オーストラリアに分布し2亜種に分けられる。日本には、主に本州中部以西に周年生息し繁殖するが、宮城県や山形県でも繁殖が確認されている。北陸地方以北のものは冬期に南下する。

県内では、平野部の淡水湿地に周年生息し、繁殖するが多くは冬季南へ渡る。

【生息地の環境 / 生態的特性】

平野部の休耕田や湿田などの淡水湿地に生息する。繁殖期は4月から10月頃で、湿田の畦など地上で営巣する。繁殖は一妻多夫性で、抱卵から育雛までを雄が行う。冬期は、休耕田や河川敷などで数羽から十数羽の小群をつくり生息する。水生昆虫や小型の無脊椎動物を採食する。繁殖期に雌は、夜間にコーッ、コーッ、と続けて鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては、県内の平野部の水田で春期から夏期にかけて稀ならず見られたが、近年は、特に都市近郊では姿を見ることが難しい程に減少している。水田の耕作制限が、以前は休耕で保障されたものが麦や大豆への転作となり、周期的に乾燥化されることで餌となる土壌生物や水棲生物が消滅していることが最大の要因である。

【保全上の留意点】

シギ・チドリの生息する水田では稲作の連続を基本として、水田本来の湿地環境を保全し、健全な生態系の回復に努めることが急務である。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.179. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.112. 世界文化社, 東京.

イカルチドリ *Charadrius placidus* J.E. et G.R.Gray

【選定理由】

主に河川中流域の河川敷に生息し繁殖するが、近年は減少傾向にある。河川敷の公園化や堤防道路の拡幅等により環境の良い砂礫地が喪失しているうえに、人の侵入が増大するなど生息条件の悪化が著しい。県内における生息数にさらなる減少が認められることかで、初版の準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 19～21cm。頭頂と上面、雨覆は灰褐色で、下面は白く胸に黒帯がある。眼先から頬にかけては黒褐色で、眼の回りは細くて黄色の縁取りがある。嘴は、小型のチドリ類としては細くて長めで、脚は淡黄色。飛翔時は、内側の初列風切基部から次列風切にかけて細い白帯が出る。静止時は、尾羽が初列風切の先端から突出する。冬羽や幼羽は、眼先から頬にかけての黒褐色が淡く、頭頂とのコントラストが不明瞭。



愛知県岡崎市, 1990年1月18日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ウスリー地方、中国東部および北部、朝鮮半島で繁殖し、冬期は中国南部からインド北部で越冬する。2亜種に分けられる。日本では、全国的に記録があるが、繁殖は本州と四国に限られている。

県内では、主に河川中流域の砂礫地に生息し繁殖する。冬期は、河川下流域、平野部の水路、池沼の畔などでも見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

繁殖期は、河川中流域の河原や中洲などの砂礫地に番いで生息する。地上に浅いくぼみを作り、小石や枯草などを敷いて営巣する。冬期は、河川下流域、平野部の水路、丘陵地の調整池畔の砂地、水の抜かれた池沼などで単独または小群で生息する。主に昆虫類を捕食し、ピオ、ピオと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

河川中流域の砂礫地環境が減少している上に人の侵入が増加し、営巣環境が悪化している。また、以前に比べて平野部での越冬数が少なくなっている。

【保全上の留意点】

河川管理では河川敷の砂礫地保全につとめ、区域を定めて人の干渉を排除するなど、この種を含む生物全体の生息環境を保全するための積極的な河川敷管理が必要である。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.183. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.114. 世界文化社, 東京.

ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田などの淡水湿地に渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少し、近年では限られた場所に少数が生息するに過ぎない。加えて、沿岸域の淡水湿地は少なくなっており、絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 17～22cm。夏羽は、頭部および上面が茶褐色で赤茶味が強く、軸斑が黒い。脇から胸にかけて明瞭な黒斑が密にある。冬羽と幼羽は、ともに脇や胸の黒斑が明瞭でないが前者は上面が灰褐色で、後者は茶褐色で模様は夏羽に似るが淡い。嘴は黒く基部に黄色があり、脚は全体に黄色。



愛知県西尾市, 1993年5月30日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

シベリア東北部で繁殖し、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドなどで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、水田や休耕田などの淡水湿地に生息する。県内では、主に春期に伊勢湾、三河湾沿岸の水田地帯に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は、4月中旬頃に水田や休耕田などの淡水湿地に渡来し、5月下旬に渡去する。数羽から20羽程度の群で生息し、水中や地上の小動物を捕食する様子が見られる。時には体を震わせながら羽を上げ下げする求愛行動を行うこともある。秋期は春期に比べて数が少ないが、7月から10月にかけて、干潟や埋立地の水溜まりなどで1～2羽が見られる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、愛西市（旧立田村）、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られ1986年の春に汐川干潟周辺で231羽が数えられたこともあるが、近年は、各々の場所で数羽から多くて十羽程が記録されるに過ぎず、著しい減少傾向にある。麦や大豆への転作による水田の乾燥化で水田の生物相が破壊されていることが、この種をはじめとする淡水湿地に生息するシギやチドリの生息環境を悪化させている。

【保全上の留意点】

シギ・チドリの生息する水田では稲作の継続を基本として、水田本来の淡水湿地環境を保全し、生態系の回復に努める必要がある。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査において、愛知県内でカウントされた本種の個体数は1981～1983年の春期が最大163羽～最小92羽であったが、現在では県内全体で数羽が確認されるのみである。

【関連文献】

- 小柳津 弘ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(汐川河口). 愛知県農林部, 名古屋.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.205. 文一総合出版, 東京.
日本野鳥の会研究部, 1982-1984. シギ・チドリ類全国一斉調査 1981年, 1982年, 1983年報告. strix vol.1-vol.3. 日本野鳥の会, 東京.
藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.122. 世界文化社, 東京.

キリアイ *Limicola falcinellus* (Pontoppidan)

【選定理由】

主に秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾の干潟や沿岸部の水溜まりなどに渡来するが、数は少ない。干潟の消失などにより1970年代以前に比べて個体数が大きく減少しており、近年は限られた場所にごく少数が生息するに過ぎず、絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 16～18cm。夏羽は、頭部および上面が茶褐色で赤茶味が強く、軸斑が黒い。脇から胸にかけて明瞭な黒斑が密にある。冬羽と幼羽は、ともに脇や胸の黒斑が明瞭でないが前者は上面が灰褐色で、後者は茶褐色で模様は夏羽に似るが淡い。嘴と脚は黒色。



愛知県西尾市, 1991年9月29日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

スカンジナビア半島北部、シベリア北部で繁殖し、中東、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。2亜種に分けられる。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、干潟や水たまり、水田などに生息する。

県内では、主に秋期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟、干拓地や埋立地にある淡水、汽水の湿地等に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

主に秋期、8月から10月頃に渡来し、干潟よりも干拓地や埋立地にできた面積の広い塩水あるいは汽水の水溜りを好む。かつて愛知県には国内でもこの種の好む環境が多く存在していた。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、藤前干潟・庄内川河口周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟があげられる。かつて、1970年秋期に鍋田干拓地で14羽、1979年秋期に汐川干潟で40羽の記録がある。近年では県内全体で秋期最大20羽程度が観察されている。国内でも愛知県は代表的な飛来地であるが、近年は生息場所が限られており環境の悪化がすすんでいる。

【保全上の留意点】

干潟をはじめ沿岸部の湿地を保全し、自然性の回復に努める必要がある。遊休の埋立地などにある程度の面積の淡水や汽水、塩水の湿地を復元することも必要な時期にきていると考える。

【特記事項】

日本に渡来する東シベリア産の亜種 *L. f. sibirica* は、国際的に見て数が少ないと考えられている。1996～1998年の春期と秋期の計6回、国内延336箇所で行われたシギ・チドリ類カウント調査では、本種のシーズン総数は最大58羽（1997秋期）であり、全国的にも数少ない種といえる。

【関連文献】

小柳津 弘ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(汐川). 愛知県農林部, 名古屋.

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.218. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 1998年秋, pp.30. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.127. 世界文化社, 東京.

吉村信紀ほか, 1970-1976. 野生鳥類生息調査結果報告書(鍋田干拓地). 愛知県農林部, 名古屋.

Hayman, P., Marchant, J. And Prater, T., 1986. Shorebirds, An Identification Guide to the Waders of the World. pp.326-327. Christopher Helm, London.

ツルシギ *Tringa erythropus* (Pallas)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の水田や水路、干潟や水たまりなどに渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少し、近年では限られた場所に少数が生息するに過ぎない。加えて、沿岸域の湿地は少なくなっており、絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 29～32cm。夏羽は、全身が黒く背に白斑があり、脚は黒色でやや赤味を帯びる。冬羽は、上面が灰色で下面は白く、眉斑が目立ち脚は赤色。嘴はまっすぐで長く、黒色で下嘴の基部だけが赤い。飛翔時は、背と腰が白く見える。幼羽は冬羽に似るが、背は褐色味が強く腹や脇に褐色の横斑がある。



愛知県刈谷市, 1988年5月17日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、少数が越冬する。

県内では、主に春期に伊勢湾、三河湾沿岸の水田地帯や干潟に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は、3月上旬に渡来し5月中旬頃まで見られる、主として水田や水路などの汽水や淡水の湿地に数羽から20羽程の群で生息し、時に干潟に大きな群が渡来することがある。秋期は、春期に比べて数が少ないが、7月から10月にかけて1～数羽が見られる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、愛西市（旧立田村）、鍋田周辺、境川河口周辺、汐川干潟周辺があげられる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られ1975年の春に汐川干潟周辺で522羽、1978年に境川河口で136羽が数えられたこともあるが、近年は、各々の場所で数羽から多くて20羽程が記録されるに過ぎず、著しい減少傾向にある。沿岸部の汽水や淡水の湿地は少なくなっており、生息条件が悪化している。

【保全上の留意点】

干潟及び水田、水路を含む沿岸部の湿地を保全し、併せて自然性の回復に努める必要がある。

遊休の埋立地などにある程度の面積の淡水や汽水、塩水の湿地を復元することも必要な時期にきていると考える。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査における愛知県内でカウントされた本種の個体数は1981～1983年の春期が最大514羽～最小214羽、1996～1998年の春期が最大53羽～最小25羽である。この数を単純に比較することは妥当でないが、確実に著しい減少傾向にある。

【関連文献】

小柳津 弘ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(汐川). 愛知県農林部, 名古屋.

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.222. 文一総合出版, 東京.

日本野鳥の会研究部, 1982-1984. シギ・チドリ類全国一斉調査 1981年, 1982年, 1983年報告. strix vol.1-vol.3. 日本野鳥の会, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.122. 世界文化社, 東京.

タカブシギ *Tringa glareola* Linnaeus

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田などの淡水湿地に渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少している。水田を含む淡水湿地にのみに生息できる種であることから、沿岸域の淡水湿地が少なくなっており絶滅の可能性がかなり増大している。

【形態】

全長 19～21cm。頭部および上面が暗褐色で白斑が散在する。眉斑は白く明瞭で眼の後方まで伸びる。夏羽は、顔、頸から胸側にかけての縦斑が明瞭だが、冬羽と幼羽では目立たない。脚は黄色く長い。飛翔時に腰と尾が白く見える。



愛知県幡豆郡一色町, 1990年8月25日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、少数が越冬する。

県内では、主に春と秋の渡り期に伊勢湾、三河湾沿岸を中心とする平野部の水田地帯に生息する。少数は、内陸の中小河川などで越冬する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月上旬から5月中旬頃まで、秋期は7月から9月にかけて、水田や休耕田などの淡水湿地に渡来し、数羽から20羽程度の群で生息する。内陸部の中小河川や養魚池などで越冬することもある。干潟を始め海岸部の塩水湿地で見られることはほとんどない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、愛西市(旧立田村)、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられ、その他、平野部の水田や中小河川でも少数が見られる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られ1979年の春期に汐川干潟周辺で375羽が数えられたこともある。近年は水田の転作による乾燥化で餌となる土壌生物や水棲生物が消滅していることで、県内での生息数が激減している。

【保全上の留意点】

淡水シギ・チドリの生息する水田では稲作の継続を基本として、水田本来の生態系を保った形の淡水湿地環境を保全し、自然性の回復に努める必要がある。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査における愛知県内でカウントされた本種の個体数は1981～1983年の春期が最大947羽～最小697羽、1996～1998年の春期が最大67羽～最小37羽であり、近年では十羽を超えることも稀になっている。この数を単純に比較することは妥当でないが、確実に著しい減少傾向にある。

【関連文献】

- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.229. 文一総合出版, 東京.
日本野鳥の会研究部, 1982-1984. シギ・チドリ類全国一斉調査 1981年, 1982年, 1983年報告. strix vol.1-vol.3. 日本野鳥の会, 東京.
藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.132. 世界文化社, 東京.

オグロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田、干潟や水たまりなどに渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少し、近年では限られた場所に少数が生息するに過ぎない。加えて、沿岸域の湿地は少なくなっており、絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 36～44cm。夏羽は、頭部から胸にかけて橙褐色、上面は赤褐色で黒色の軸斑と白斑があり、胸側と脇には黒色の横斑がある。冬羽は、頭部から上面にかけて灰褐色で、下面は白色。幼羽は、上面の羽縁がバフ色で頭部に黄褐色味を帯びる。嘴はまっすぐで長く、脚は黒色で長い。飛行時は、風切の白い横帯と腰の白色、尾の先端の黒色がよく目立つ。雌の方が雄よりやや大きい。



愛知県豊橋市, 1992年8月20日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸中部、北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来する。

県内では、主に春期に伊勢湾、三河湾沿岸の淡水や汽水の湿地、水田などに生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月中旬から5月下旬頃まで、秋期は8月から10月にかけて、水田、干潟、水たまりなどの湿地に渡来し、数羽から20羽程度の群で生息する。春期の渡来数は、秋期に比べて少ない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られ1975年の秋に鍋田周辺で150羽が数えられたこともあるが、近年は、県内合計で数羽が記録されるに過ぎず、著しい減少傾向にある。沿岸部の広い湿地は消滅し、水田は周期的な転作による乾燥化で餌となる生物が消滅している。

【保全上の留意点】

オグロシギをはじめ淡水系水鳥を保護するためには、生息地の水田の稲作の継続を基本として、水田本来の生態系を保った形の淡水湿地環境を保全し、自然性の回復に努める必要がある。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査における愛知県内でカウントされた本種の個体数は1981～1983年の秋期が最大121羽であったが、近年の観察では県内合計で10羽に満たない。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.235. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.134. 世界文化社, 東京.

吉村信紀ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(鍋田地区). 愛知県農林部, 名古屋.

ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* (Linnaeus)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の干潟に渡来するが、数は少ない。干潟の喪失など沿岸域の湿地の消失により個体数が減少し、近年では限られた場所にごく少数が生息するに過ぎず、絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 53～66cm。上面は、淡褐色で、頭頂から背、肩羽、雨覆に暗褐色の斑がある。顔、頸、胸にかけて黒褐色の縦斑があり、腹と下尾筒は淡褐色。翼下面は淡褐色で、下雨覆に黒褐色の横斑がある。腰は背と同様な褐色で、上尾筒と尾は淡褐色で黒褐色の斑がある。嘴はとても長く、大きく下に湾曲する。雄雌同色だが、雌の方が雄よりも大きい。



愛知県幡豆郡一色町, 1985年10月25日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

シベリア東北部・中国東北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、フィリピン、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来する。

県内では、春と秋の渡り期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

近縁で姿形がよく似ているダイシャクシギが塩水の干潟に強く依存しているのに対し、ホウロクシギは汽水や淡水の湿地にも生息する。春期は3月中旬から5月下旬頃まで、秋期は8月から10月にかけて単独または小群で生息する。春は耕作前の乾いた水田に入って採餌することも多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地は、庄内川河口・藤前干潟、飛島干潟など伊勢湾奥部であるが、矢作川河口周辺、汐川干潟、伊川津干潟など三河湾沿岸にも少数が定期的に渡来する。1972年の秋に鍋田周辺で22羽、1970年代半ばに愛知県全体で67羽が数えられた。その後も、1981年に飛島干潟で21羽、1987年に庄内川河口で28羽などの記録がある。しかしながら、近年は庄内川河口を中心に数羽、三河湾の各所で数羽が記録されるに過ぎない。伊勢湾奥部の干潟は、本州における本種の生息地として重要だが、干潟は消失しており水田は乾燥し、湿地は消滅している。

【保全上の留意点】

現存する干潟を保全するとともに、本種が満潮時に休息できる環境（ねぐら）の確保に留意する必要がある。併せて、失われた干潟の再生に努めることが望ましい。水田に本来の生態系が保たれていれば渡りの季節に水田にも入ることから沿岸部の水田の生態系保全も重要である。

【関連文献】

- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.238. 文一総合出版, 東京.
辻 淳夫, 1987. 藤前干潟の価値とその重要性. 藤前干潟を守る会, 名古屋.
藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.136. 世界文化社, 東京.
吉村信紀ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(鍋田地区). 愛知県農林部, 名古屋.

セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus)

【選定理由】

主に春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の淡水湿地に渡来し、一部は水たまりなどで越冬し年によりごく少数が繁殖する。沿岸域の淡水湿地は少なくなっており、繁殖環境も安定していないため絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 35～40cm。雄は、背と翼は緑色光沢のある黒色で、そのほかは白色。頭部は白色のものと頭頂から後頸にかけて黒色のものがあり、黒色部の形状は変異がある。雌は、背が褐色味を帯びた黒色で、光沢はない。幼羽は、背が褐色で黄褐色の羽縁がある。脚はピンク色で非常に長く、嘴はまっすぐで細い。飛翔時は、背、腰、尾の白色が目立つ。



愛知県幡豆郡一色町, 1985年8月20日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア中部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリア、北アメリカ中部から南アメリカと広く分布し、5～6亜種に分けられる。日本には主に春と秋の渡りの時期に渡来するが、繁殖、越冬もしている。東京湾沿岸の埋立地や水田で小規模な繁殖群が確認されており、越冬は、沖縄で比較的数量が多い。

県内では、伊勢湾、三河湾沿岸の農地や埋立地に生息し一年を通じて見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月から5月、秋期は7月から10月にかけて、沿岸部の淡水湿地に渡来し、単独から数羽の群で生息する。干拓地の農地や水路、埋立地にできた池の周辺など湿潤で草丈の低い草生地の地上に営巣する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺で記録が多い。1975年に、鍋田付近の埋立地で日本で初めて繁殖が確認され、以降は当地周辺で数例の繁殖記録がある。1985年には矢作川河口周辺（一色町）、1989年には汐川干潟周辺（田原市）でも繁殖し、現在では最大で10番い程度の繁殖行動が推測されるが、湿潤な休耕田などの安定した繁殖環境が喪失したため繁殖の成功率は極めて低く、ほとんどが失敗する年も少なくない

【保全上の留意点】

水田、ため池を含む沿岸部の淡水湿地を保全し、繁殖環境の確保と創出に努める必要がある。

【関連文献】

緒方清人・杉山時雄・矢沢美智子・柿本 浩, 1986. 西三河鳥類目録 1985.12. 西三河野鳥の会, 岡崎.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.250. 文一総合出版, 東京.

ジュウイチ *Cuculus fugax* Horsfield

【選定理由】

夏期に、主に東三河地方の山間部の森林に生息し繁殖していると考えられる。県内における生息状況は必ずしも明らかでないが、元来数が少なく、絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形態】

全長 32cm。頭部から背は灰黒色で下面は淡い赤褐色、後頸に白斑がある。尾は灰色で先端に淡朱色の斑がありその内側に太く黒い横斑がある。眼の周りに黄色の縁取りがあり、脚は黄色い。幼鳥は下面が白く黒褐色の縦斑がある。



石川県舳倉島, 2000年5月21日, 石井照昭 撮影

【分布の概要】

ウスリー、中国東北部から南部、朝鮮半島、ネパール、東南アジアで繁殖し、東南アジアで越冬する。日本には、夏期に北海道、本州、四国、九州に生息するが数は少ない。

県内には、夏期に東三河地方の山間部にごく少数が生息する。春と秋の渡り時期には、平野部でも記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

夏期に、広葉樹林や針広混交林に生息し、コルリ、オオルリ、コマドリなどに託卵し繁殖する。飛びながら大きな声でジュウイチーツ、ジュウイチーツと繰り返し鳴き、夜間も盛んに鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では、設楽町、豊根村、新城市、岡崎市などの山間部で繁殖期に生息が確認されているが、数はごく少ない。繁殖確認は1965年に閨苅溪谷でオオルリに託卵した1例が知られる。

【保全上の留意点】

広葉樹林や針広混交林を保全し、中長期的には新たに創出していくことが望ましい。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.72. 文一総合出版, 東京.
樋口広芳, 1991. 日本のカッコウ類の託卵相手. 朝日百科 動物たちの地球 22, pp.296-299. 朝日新聞社, 東京.

ヨタカ *Caprimulgus indicus* Latham

【選定理由】

夏期に、平野部から丘陵地および山間部の林に生息し繁殖するが、近年は平野部や丘陵部から繁殖期の確認記録が極めて稀になっており、山間部では特に県内東部の山地における確認記録も減少していることで、初版の準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 29cm。頭頂および上面は灰褐色で、細かく黒い虫くい状の斑がある。翼は細長く灰白色で、黒色と橙褐色の複雑な斑がある。雄は、喉、頬の下、初列風切に白色部があり、外側尾羽に白斑がある。雌は、喉と翼の白色部は淡褐色で、外側尾羽の白斑はない。嘴は小さいが大きく開き、付け根に剛毛がある。



石川県舳倉島, 2002年5月4日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

インド、ネパール、東南アジア、ロシア極東南部、中国東部、朝鮮半島、マレー半島に分布し、北方のものは冬期に南下する。日本では、九州以北に夏期に生息する。

県内では、夏期に平野部から丘陵地および山間部の林に生息し、繁殖する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

県内では4月下旬に渡来し、平野部から山間部の明るい林に夏期に生息し繁殖する。夜間に、甲虫、トビケラ、ガなどの昆虫類を大きな口を開けて、空中を飛びながら捕獲する。夕暮れ時から夜半にかけて、キョキョキョ・・・とかん高い声で鳴く。昼間は、林の中の横枝に平行に止まり休息する。特に巣材などは用いず、林縁の地上などに直接1~2卵を産卵する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては、平野部から丘陵地および山間部の雑木林に普通に生息し1972年には名古屋市緑区でも繁殖が確認されていたが、近年は、平野部、丘陵部での確認が稀になっており山間部でも観察記録が少なくなっている。農道や林道など、丘陵部や山間部の整備された道路では轢死例も少なくない。

人工光の蔓延により、餌である昆虫類の生息環境が攪乱されていることも減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

平野部から丘陵地にかけての雑木林の保全、道路照明などの人工光を改善して昆虫類等の生息に影響を及ぼさぬ対策、不要な拡散を防止する対策が必要と考える。

【関連文献】

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.89. 文一総合出版, 東京.
柿澤亮三・小幡途銀次郎, 1997. 巣と卵図鑑, pp.86. 文一総合出版, 東京.
坂根隆治, 1991. ヨタカ -声はすれども姿は見えぬ-. 朝日百科 動物たちの地球 26, pp.36-38. 朝日新聞社, 東京.
皿井 信, 1996. 葦毛湿原の野鳥たち. 愛知の野鳥 1996, pp.253-259. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.181. 世界文化社, 東京.